



奈良県立大学情報誌
コモンズ
— 学びの共同体 —

- 奈良県立大学 coc シンポジウムの開催 / 第2回 地域づくり連絡協議会の開催…P1-2
- 明日香村のインバウンド推進…P3-4
- 産学連携ツーリズムセミナー in 関西 最優秀賞受賞報告 / 天理市と本学が連携協定を締結…P5-6
- 十津川村谷瀬集落 村づくりサポート活動の報告…P7-8
- 宇陀市 × 奈良県立大学 地域創造セミナー報告 / 「大和な雛まつり」ボランティア活動報告…P9-10
- 奈良留学物語 ～留学生紹介～ …P11

奈良県立大学〈地（知）の拠点整備事業〉 シンポジウムが開催されました

平成 27 年 3 月 22 日（日）、本学 3 号館 2 階の多目的ホールを中心会場として、平成 26 年度〈地（知）の拠点整備事業〉シンポジウム「地域における多様な教育研究と実践活動の展開 ―地（知）



▲ シンポジウム第 1 部のもよう。
於）奈良県立大学 3 号館多目的ホール

の拠点の確立に向けて ―」が、内外関係者および一般地域住民 70 名余りの参加のもとに開催されました。

伊藤忠通学長の挨拶に始まり、東京大学先端科学技術センター所長の西村幸夫氏より、『まちの魅力の再発見のしかた』をテーマとして基調講演をいただきました。

奈良公園や興福寺等の寺社は、どこからどこまでが境界なのかという疑問に対し、春日大社表参道と位置づけられる『三条通り』を起点に考えれば、全て合理的に説明ができること等、私たちにとって非常に身近なテーマを分かりやすく解説いただきました。



▲ 東京大学先端科学技術センター所長
西村幸夫氏の基調講演

続いて、『奈良県立大学生による地域活動の発表』と題して、本学学生がそれぞれ取り組んでいるフィールドワーク活動の発表がありました。発表されたプロジェクトは①「お寺と商店街を活用した観光まちづくり ―世界遺産のまち、奈良県斑鳩町を事例として―」（林まどかさん）、②「しあわせの王寺計画 ―雪丸ロード整備計画の提案とイベントのサポート―」（渡邊健吾さん、毛馬美優さん）、③「奈良低炭素・

循環型社会形成プロジェクト」（中井翔子さん）の 3 つのグループです。本学学生の多様な地域における取り組みを広報することができました。



▲ 「お寺と商店街を活用した観光まちづくり」林まどかさんの発表



▲ 「しあわせの王寺計画」
渡邊健吾さん、毛馬美優さんの発表



▲ 「奈良低炭素・循環型社会形成プロジェクト」中井翔子さんの発表

第1部の締めくくりとして、3名の観光分野有識者を迎え、麻生憲一教授をコーディネーターとし、『奈良のインバウンドを考える』をテーマにパネルディスカッションが行われ、現状や課題、今後、受け入れ側として我々は何をするべきなのか等、熱い議論が展開されました。

その後、会場を変更し第2部に移り、本学の教員による10テーマの『地域志向教育研究発表』が行われ、シンポジウム参加者との間で熱心な質疑応答が繰り広げられました。

以上、本シンポジウムは、本学の地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)の取り組みの2年目を総括するものでありました。長時間にわたる充実した内容で、参加者においても、島根県や東京の大学をはじめ、多くの県内自治体・各種団体の方々にご参加をいただき、盛会裏に終了することができました。



▲ パネルディスカッション
「奈良のインバウンドを考える」



▲ シンポジウム第2部
「地域志向教育研究発表」のもよう

第2回 地域づくり連絡協議会の開催

平成27年3月23日(月)、本学協働サロンにおいて、大学COC事業連携4市村から計8名の委員にご出席いただき、平成26年度『第2回 地域づくり連絡協議会』が開催されました。

同協議会は、伊藤忠通学長の挨拶から始まり、麻生憲一教授よりCOC事業内部評価における各評価項目と評価基準、今年度の実績についての解説、および低評価項目の原因分析等についての説明がありました。

その後、4コモンズの各代表教員から、具体的な活動状況や学生の取り組みについての説明があり、ガイドブック等実際の活動の成果物についても紹介がされました。

引き続き行われた意見交換においては、4市村の委員から、各々地域活動における問題点や反省点の指摘、また来年度の取り組みについて具体的な要望事項の意見発表がありました。

本学の活動に対する期待の高さがうかがわれ、より強固な連携を相互に確認することで今年度の活動を総括しました。



▲「第2回 地域づくり連絡協議会」のもよう

明日香村のインバウンド推進

JTBグローバルマーケティング&トラベル 林 勇一

平成 27 年 3 月 21 日 (土) ～ 22 日 (日)、飛鳥ニューツーリズム協議会 (以下、「協議会」という。) の山中様のご紹介により、奈良県明日香村にお招き頂きました。初日は、明日香村商工会にて奈良県立大学麻生ゼミの麻生先生及びゼミ生の皆さんと日本全体のインバウンドの推進状況や当地



における取り組みについての意見交換、翌日は貴学にて「奈良のインバウンドを考える」というテーマにより、パネルディスカッション参加の機会を頂きました。

21 日は、冒頭に麻生先生から今までの取組事例の紹介を頂くとともに、ゼミ生の皆さんからの現状をお伺いしました。地域を良くしたい、国内外のお客様に明日香村の事をもっと知ってもらいたいと、その様な思いでゼミ長を中心に皆さんが活動されている事が良く理解できました。

また、麻生先生のブレの無い方針のもと、ゼミ生の皆さんは地域活性化に向けた知見の吸収や明日香村の振興に尽力されており、大変感銘を受けました。改めて、観光を通じた地域振興や交流人口の拡大には、地道な努力と弛まぬ知見・知恵の創出が必要な事を再認識した次第です。

さて、弊社はインバウンドのお取り扱いを軸に事業を展開しています。ご承知の様に、訪日外国人のお客様の伸びは、本年度も引き続き好調に推移しています。また、訪日外国人の求める旅の傾向も大きく変化が起っています。特に、①団体旅行から個人旅行の比率が高まり、②旅行に体験や趣味に特化したこだわりを求める傾向が強くなった、③旅行中における地域住民との交流やコミュニケーションの機会創出を求める声が増えてきた、④大都市圏周遊型から地域滞在型ニーズの高まり等、顕著になってきたと感じています。

この様にインバウンドを取り巻く環境に変化が出てきた昨今、明日香村は旅行会社にとっても興味深い地域だと思います。アクセス的には明日香村は関西空港から車で約 1 時間少々、京都からも 2 時間以内で移動できる位置関係にあります。そして、日本の生活を体験出来る民宿がいくつかあり、現在の日本文化・生活が体験出来る面白い地域です。特に、欧米人は一般的な観光ではなく、地元住民と会話を楽しんだり、地元住民の生活を自ら体験する事を求めています。民泊体験をして、お布団の敷き方や和食や郷土料理のつくり方、一



緒に地元の商店やスーパーに買い物に出かける等、私たちの日常生活を体験できる環境を提供する事で海外からの誘客に結び付ける事が出来ると思います。「地域の日常」は外国人のお客様にとっては、全てが「非日常の体験」となります。

次に、今後の取組といたしまして二点ほどお話いたします。

一点は、先に触れました「地域の日常」と「非日常の体験」の関係についてです。普段の地域の景色やここでしか見られない自然現象、昔からの生活習慣や文化風習等、これが外国人に受ける（響く）のか？という事を発見して、それを見せて体験してもらう事で当地の価値は高まると思います。つまり「地域の日常」の再発見と磨き上げです。引き続き、麻生ゼミのゼミ生を中心に、協議会・商工会等の連携を深め地元の皆様が一体となり、地域に興味と好奇心を持ち明日香村らしい日常の体験を発見されることに期待しています。



二点目は観光振興における広域連携の推進です。広域連携は地域の魅力ある観光資源同士を面で繋げ、お客様の宿泊滞在を促進する動きであると考えます。その際のポイントは、受け入れ（民泊）の拡充や地域の特色を反映した体験素材の開発と目利きになると思います。是非ともお願いしたいのは、日本国内の先進地を視察頂く事で、先進地と地域を比較して良い点や地域の課題も見えてきます。地域を中から見るだけでなく、外から見る事で気付きの発見に繋がることでしょう。

上記二点の「まとめ」として・・・私は、今回、奈良市内のホテルに宿泊させて頂きました。22 時頃、中国からの団体ツアーのお客様がホテルフロントに大勢いらっしゃいました。翌朝には朝食を済ませて8時半頃に出発されました。聞くと大阪・京都にてホテルが取れない為に奈良市内のホテルに宿泊したとのことでした。奈良を見学しないのはもったいない事だと感じました（確かに最近では、大都市圏を中心に宿泊施設の予約が困難な事情は否めませんが。）。県域全体において、日常に埋もれた素晴らしい地域資源の掘り起こしや体験素材の整備、効果的情報発信など着手すべきマーケティング活動や解決しなければならない課題は沢山おありだと思います。また、同時に奈良県全体へのお客様回遊の仕組みづくりや近隣県との広域連携によるマーケティングや情報発信を強化される事も願っております。是非ともその中心的プレイヤーとして、協議会が積極的に奈良県全体のインバウンド誘客を牽引する様な思いで活動されることを強く願っています。

結びに、国策としてインバウンドの大都市圏集中から地域分散化の推進を図る中で、私たち旅行事業者も同じ方向のもと推進を致します。最近では「グローバル化」という言葉をよく聞きますが、日本を旅行する外国人が、私たちが予想もしていなかった地域に来る事も増えてきました。それだけ日本が近い存在になり、注目される訪問地になったのだと思います。皆様とのますますの連携を深めながら、今後とも地域活性の一助となるべくお手伝いをさせて頂きたいと思います。この度は大変ありがとうございました。

奈良県立大学が 「産学連携ツーリズムセミナー in 関西」 で最優秀賞を受賞！！

平成 27 年 2 月 10 日（火）、公益社団法人日本観光振興協会が「関西が支える観光立国・日本」をテーマに開催した「2014 年度産学連携ツーリズムセミナー in 関西」（於、メルパルク京都）において、奈良県立大学生のプロジェクト発表「お寺と商店街を活用した観光まちづくり～世界遺産のまち、奈良県斑鳩町を事例として～」（『斑鳩ゆかしかるプロジェクト』）が見事に最優秀賞を受賞しました。



▲ プレゼンテーション当日のもよう

当日の発表は、林まどかさん（地域創造学部地域総合学科 4 年生）と山本美和さん（地域創造学部地域総合学科 4 年生）が同プロジェクトチームを代表して、プレゼンテーションを務めました（発表当時は両名とも 3 年生）。審査にあたっては、プロジェクトを通じた地域の方々と本学学生との繋がり・連携のあり方が高く評価されました。

また、平成 27 年 2 月 24 日（火）、麻生憲一教授の引率のもと、同プロジェクトチームのメンバーが小城利重斑鳩町長を表敬訪問し、最優秀賞受賞の報告をおこないました。

この受賞を機に、今後も、斑鳩町の皆さんとともに『斑鳩ゆかしかるプロジェクト』に継続的に取り組むことで、より一層、地域の活性化に貢献していきたいと考えています。



▲ 林まどかさん（左）と山本美和さん（右）



▲ 斑鳩町長を表敬訪問

天理市と奈良県立大学が 包括的連携協定を締結しました

平成 27 年 5 月 15 日 (金) 午前 10 時 00 分～午前 10 時 30 分、奈良県立大学 3 号館 1 階の協働サロンにおいて、「天理市と奈良県立大学との包括的連携に関する協定書」の締結式が執り行われ



▲ 握手を交わす
並河健天理市長 (右) と伊藤忠通学長 (左)



▲ 締結式出席者の記念撮影

れました。

挨拶にあたって、並河健天理市長は、「『地方創生』は自治体にとって重要なテーマの一つになっています。自治体自らが行政の枠にとらわれることなく、受け身にならず積極的に関わっていくためにも、地域創造に重点を置いている奈良県立大学と一緒に、魅力的なまちづくりを進めていきたいと考えています。」と述べられました。

それに答えて、伊藤忠通学長は、「本学は、全国ではあまり例のない『地域創造学部』がある大学です。教員含め学生も地域に貢献する人材を育てていく『地域に根差した大学』を目指すのが本学の使命であり、そこに期待していただいたのだと思います。学生が地域で学ぶ機会、教員の教育研究成果を還元できる機会を与えていただければと考えています。」と同市との連携協定における、今後の展望を述べられました。

この包括的連携協定を結ぶことによって、同市における本学の取り組みがより一層有意義なものとなることが期待されます。

「桜井市観光まちづくり協議会」よりベンチを寄贈していただきました

「桜井市観光まちづくり協議会」より、奈良県立大学地域サテライトに木製のベンチをご寄贈いただきました。桜井市は木材の集散地として有名で、製材業が盛んです。このベンチは「桜井木材協同組合」に作っていただきました。

地域交流棟が新設されましたら、そこに設置させていただく予定にしています。



十津川村谷瀬集落 村づくりサポート活動の報告

～<ゆっくり体験>を振り返って～

1. はじめに

2011年に発生した紀伊半島大水害は、十津川村に甚大な被害をもたらしました。十津川村は、人口減少・少子高齢化・産業の低迷等の問題を元々抱えていた地域であり、震災前の姿に戻す「復旧」ではなく「復興」へつなげようと、村が一丸となって立ち上がりました。そして、その一環として「新集落づくりに向けた集落再生プロジェクト」が始動し、モデル集落として高森集落と谷瀬集落が選定されました。

谷瀬集落では、月に1回「寄合」（住民ワークショップ）を開催し、集落の人たちが中心となって、交流活性化事業（「ゆっくり散歩道」の整備・モニターツアーの開催・移住定住に向けた仕組みづくり）および特産品開発事業に取り組んでいます。その活動に、2014年度から奈良県立大学（以下、県大）および奈良女子大学（以下、奈良女）の教員・学生がサポーターとして参加しています。本稿では、学生がモニターとして参加した<ゆっくり体験>について報告します。

2. モニターツアー<ゆっくり体験>

2014年11月8日～9日の1泊2日で、県大・奈良女の学生11人が<ゆっくり体験>に参加しました（図1）。

<ゆっくり体験>を振り返り、学生が2グループに分かれて、「谷瀬での思い出」と「今度谷瀬でしたいこと」をテーマとしたワークショップを開催しました。出された意見の一部を図2に紹介します。

■11月8日

12:00 谷瀬到着

13:00 森山神社に集合
掃除



展望台で休憩



16:00 餅まるめ体験と立て看板づくり



■11月9日

9:00 3グループに分かれて住民の方へインタビュー
(テーマ:「谷瀬の吊り橋」「村のお祭りの今と昔」等)

11:00 吊り橋茶屋で昼食&お供え物の購入
ゆっくり散歩道を歩いて森山神社へ

12:30 神事の準備と総代から神事の説明

13:00 神事 祝詞奏上



13:30 餅まきスタート・お神酒の拝戴



15:00 <ゆっくり体験>の振り返りワークショップ

17:00 解散

図1 モニターツアー<ゆっくり体験>のスケジュール

「谷瀬の思い出」については、「たくさんの自然」「水の音」「澄んだ空気」「吊り橋や展望台からの景色」「道端の蝶々や蜂」等自然の豊かさ、「激しい餅まき」「餅だけではない餅まき（カップラーメンやお菓子がまかれる）」等イベントへの参加、「手作りの料理」「めはり寿司」等料理に関する意見が出されましたが、最も多かったのが「迎えてくれる人が全員笑顔」「餅まき後の住民との会話」「（餅まるめ）作業をしながらの会話」「住民から昔話を聞いたこと」等集落の人たちとの交流についてでした。

また、「今度谷瀬でしたいこと」については、「農作業をしたい」「郷土料理を作りたい」「お茶を作りたい」「マツタケを採りたい」等いろいろな体験をしたいという意見が多かったのですが、単に作業をやりたいわけではなく、集落の人たちと一緒にいろいろな作業をすることを希望していました。

モニターツアーは交流人口を増加させ将来的には谷瀬集落に移住してくる人を増やすことがひとつの目的ですが、それだけではなく、地元の人にとっては当たり前の「丁寧な暮らしづくり」や「人と人との絆」が外の人たちから見ると宝物であること、外の人たちが集落の人との交流を望んでいること等、集落の人たちがこれまで気づいていなかった集落の良さを再認識する機会にもなったと思います。

3. 村づくりの今

2015 年 2 月、学生が大勢来た時や移住希望者が長期滞在する時のために、集落が空き家を借り上げてゲストハウスを開設しました。また 3 月、ゆっくり散歩道に集落の人たち手作りの大きな水車が完成しました。そして 4 月には一般の人を対象にモニターツアーを開催する等、交流活性化事業が進められています。また、特産品開発事業の一環として、「谷瀬どぶろくプロジェクト」が始動し、県大・奈良女の教員と学生も酒米づくりに参加しています。

集落の人たちが話し合って時間と労力を出し合って回り始めた村づくり。村の水車のように、ゆっくり回っています。今後も教員と学生が村づくりの一助になればと思います。

（コミュニティデザイン コモンズ 神吉優美）

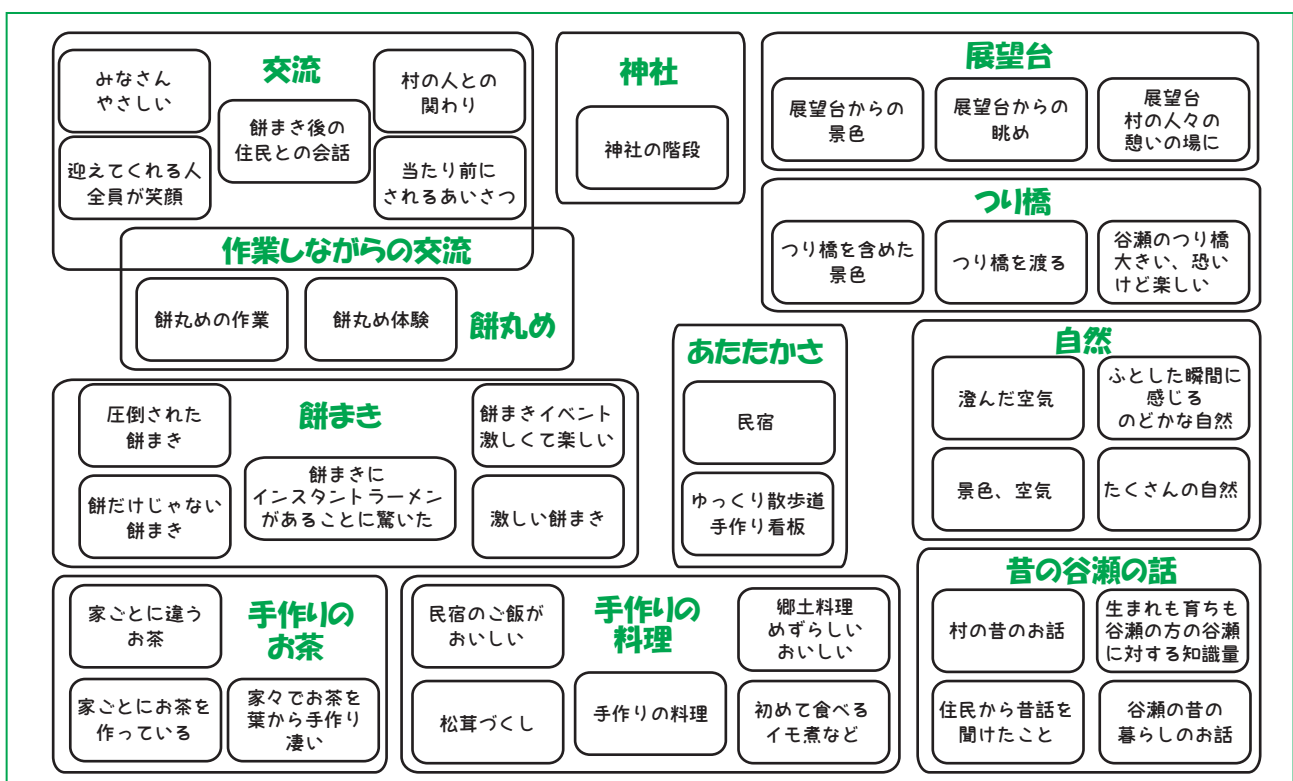


図2 <ゆっくり体験> 振り返りワークショップで出された学生の意見

宇陀市 × 奈良県立大学連携協力事業

産官学民連携による地域創造セミナー

～ 於）宇陀市役所、榛原総合センター ～

平成 27 年 2 月 19 日（木）、伊藤忠通学長、坂西明子教授、栗村俊夫准教授、斎藤宗之准教授の引率で、地域経済コモンズの学生 11 名が、本学と連携協定にある宇陀市を訪問。宇陀市と本学の連携協力事業「産官学民連携による地域創造セミナー」に参加しました。

この日は、10 時より宇陀市役所 3 階庁議室において、竹内幹郎宇陀市長と伊藤学長が対談をされました。対談は伊藤学長によるインタビュー形式で進められ、参加学生はその様子を見学し、宇陀市長から市政運営方針や「地域創生」についてのお話をお聞きしたほか、疑問に思ったことを質問させていただく時間もいただきました。

学生たちにとっては、普段はめったに立ち入ることのできない場で、どこかソワソワと緊張した面持ちでしたが、貴重な機会をいただき、とても良い経験になったのではないかと思います。

対談終了後は、榛原総合センターに移動して、地元宇陀で栽培されている薬草を使った料理教室（「宇陀市薬草料理教室」）が開催されました。食生活改善推進員協議会の方々の丁寧なご指導のもと、参加学生はそれぞれのチームで協力して薬草料理を作り挑戦し、出来上がった料理を、昼食として美味しくいただきました。完食はもちろん、ご飯を何杯もおかわりをする学生もいました。

昼食後は、宇陀市の各団体との意見交換会が開かれ、いただいた薬草料理の感想、薬草を活かしたこれからの宇陀市のまちづくり等について、学生自身がそれぞれ思うところを述べ、地元の方々と意見を交わしました。

参加学生の中には、このセミナーで初めて宇陀市を訪れる学生も何人かいました。その意味でも、今後、宇陀市と本学とが連携協力して、取り組みを実施していくに当たって、とても大切な一歩になったと思われます。



充実した 1 日でした。



「大和な雛まつり」で県大生が ボランティア活動



金魚飾りはフェルト製です ▶

◆「大和な雛まつり」とは？



▲メイン会場「旧川本邸」のエントランス

「大和な雛まつり」は大和郡山市でおこなわれる早春イベントです。寺社・町屋・店舗などで雛人形を飾る展示スペースが 120 カ所ほど設けられ、イベント期間中は、メイン会場である旧川本邸（大和郡山市洞泉寺町）を中心に、多くの観光客が訪れ、城下町一帯は華やかな雰囲気になります。

第 4 回目の開催となった昨年度より、奈良県立大学では有志の学生が、旧川本邸を彩る金魚飾りの制作や飾り付け、さらには、同時開催される音楽イベント「音 de つなぐ大和な雛まつり」の運営スタッフとして、微力ながら協力をしています。



▲県大生が金魚飾り作りに挑戦しました
一つ一つ手づくりなので結構大変です

県大生活動 レポート

音 de つなぐ 大和な雛まつり

2 月の初め頃から運営スタッフとして参加しました。スタッフは 20 名ほどで、大学生の私以外は 60 ～ 70 代というおばあちゃん世代だったため、孫のように可愛がってくださいました。私は旧川本邸にて雛人形を飾り付ける前の、掃除の段階からお手伝いに参加し、その方々の知恵に驚くばかりでした。壊れかけの窓やそげがある床など不具合が多い中、あっという間に改善していき、先人の知恵の偉大さを感じました。



2 月下旬からイベントが始まりました。郡山、その他奈良県、県外からも多くの方々に来ていただき、毎回 100 名以上のお客様で大変賑わっていました。また、イベントが始まって数日経過したとき、司会をやってみないかというお声掛けを受け、会場に溢れんばかりのお客様の前でお話をするという良い経験をさせていただきました。お客様は本当に温かい目で見てください、温かい拍手をいただき、私も温かい気持ちになりました。

今回イベントに携わった大和郡山のみなさんは心優しい、温かい方々です。みなさんにいただいた幸せを胸に残りの大学生活を過ごしていきたいと思っています。

（地域創造学部 地域総合学科 4 年生 宮 史華）

2014年秋に台湾から奈良県立大学に留学してきた陳昭容さんと邱奕維君に、留学のきっかけや日本での生活について話をうかがいました。

■日本のアニメとアイドルが大好き！

井崎 日本に興味をもったきっかけは？

陳 最初はアニメですね。特にセーラームーンやポケモンが好きでした。そのうち日本のアイドルに興味をもつようになって、高校卒業後、日本語の勉強を始めました。

邱 僕は台湾と日本のハーフの友達に「鋼の錬金術師」を勧められてアニメが好きになり、高校も日本語学科に進学しました。

石原 なぜ奈良県立大学を選んだのですか？

陳 関西が好きというのがありますが、私の大学に留学に来ていた県大生と仲良くなって勧められたのが一番の理由ですね。

■日本と台湾の似ている点・違う点

井崎 奈良で暮らしてみて驚いたことは？

陳 閉店時間が早いですよね。また、街灯も少なく、夜ちょっと怖いと感じます。

邱 ごみ箱が少ないですよね。

陳 野菜・果物や乗り物の値段が日本は高いですよ。でもホテルは台湾の方が高いです。

あと、日本人は辛い食べ物を食べませんね。私にとっては、日本の麻婆豆腐は全然辛くないです。「赤から」の5～6の辛さでまあまあ辛いかなというレベルです。

逆に、関西人と台湾人の似ているところは、明るい性格や困っている人を手助けする親切な心だと思います。



石原 奈良の好きなところは？

邱 鹿とともにくつろげる奈良公園や東大寺。

陳 奈良のゆったりした雰囲気が好きです。

■旅行に行きたい

石原 留学中にやりたいことは？

陳 旅行に行きたいです。今一番行きたいところは広島県。おいしいものを食べたりきれいな景色を観たいです。原爆ドームにもぜひ行ってみたいと思っています。

邱 北の方はけっこういろいろな場所に行ったので、今度は南の方に行きたいです。瀬戸内海にあるうさぎ島(大久野島)にも行ってみたいです。

■将来の夢

石原 将来の夢は？

陳 日本の旅行会社やホテルで働きたいです。

邱 日本の大学院に進学したいと思っています。

2人の日本語の上手さにびっくりしました。残り半年の日本での生活を思いっきり楽しんでもらいたいと思います。

(神吉専門ゼミ 井崎加奈子 石原由理)